ヴィーネの彼氏世話日記

Gliscor

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ちょっとしたことから悪魔の月乃瀬＝ヴィネット＝エイプリルと付き合うことになった現在大学生の不破正義（ふわ　せいぎ）。

――しかし、いざ恋人になって初めて彼の家に上がったヴィーネが見たものは「調理道具をほったらかしにしたままのキッチン」「ゴミだらけの部屋」「そこらに転がってる衣服」というあの天使の部屋と変わらない彼のひどい生活態度だった。

『昔は自分もしっかりしていてカッコよかった』などと嘘のような言い訳をする正義の言葉に聞く耳も持たない彼女は正義の世話をすると決心し――。

目　次

第1話　悪魔彼女とダメ彼氏　――　1
第2話　運命的なエンカウンター（？）　12

第1話　悪魔彼女とダメ彼氏

「はぁ～…　また…」

葉が青くなり始めた初夏の朝、とあるマンションの３０２号室でインターホンと睨めっこしながらヴィーネはため息をついた。

（昨日ちゃんと朝行くっていったのに…）

このまま待っていても仕方がない、そもそもヴィーネにも学校があるのだ。やむを得ず、といった感じで持ち前の合鍵を使用してヴィーネは扉を開けた。

「ちょっと―！正義！」

「ふぁ…　むにゃ…」

ヴィーネが勢いよく扉を開けて声を張り上げて部屋入った。ベッドには一人の青年が寝転がっており、その様子を見てヴィーネは　またか　といった様子でまたひとつため息をついた。

「も―！やっぱりまだ寝てた！」

「なんだヴィーネか…　もうちょっと…　ってヴィーネ!?」

　青年は驚いた様子で勢いよくベッドから飛び起きた。この青年の名前は、不破（ふわ）正義（せいぎ）、ついさっき勢いよく部屋に入ってきたヴィーネとは恋人の仲である。
「もう…　またカップラーメンばっかり食べてる…　ちゃんと野菜も食べてって冷蔵庫に入れてあげたじゃない」
「いや、ちょいちょい…　そうじゃないだろ」
「？」
　恐らく昨晩食べたであろうキッチンに置いてある空のカップラーメンの入れ物を片付けながら喋っていたヴィーネの口を止めるように正義はツッコミを入れた。
「お前、何で俺の部屋に平然と入ってきてんの？」
「え？　それはこれを使ったから」
　何か問題でも？　というようにヴィーネは手のひらの合鍵を正義にちらっと見せてみた。
「おまっ…　いつの間に…　てかそれ犯罪だろ！」
「え…　ダ、ダメだった…　？」
「いや、別にいいけど…　ていうか鍵が欲しかったなら言えよ、そのくらいいつでもやるからさ…」
「そ、そう？　わかった…」

少し眠そうに頭をかきながら言ったその正義の発言にヴィーネは少し顔を赤くする。ヴィーネは正義の発言に対して弱い、どうも恋人という関係に慣れていないからだろうかは知らないが、ヴィーネは彼のちょっとした優しさのある発言に対して事あるごとに照れてしまうのだ。

が、しかし———。

「で、朝っぱらから何?」

その発言でヴィーネの少し赤くなっていた顔は一気に冷めた。

「で　じゃないでしょ!　朝ご飯作りに家に行くって昨日連絡したわよね!?」

「あー…　そういえば…　あはははは…、ま、まあ人間誰でもうっかりする時はあるよな、うん!」

「正義の場合は四六時中うっかりしてるじゃない!罰として棚にあるカップラーメンは全部没収します」

そう言うとヴィーネはキッチンの隣にある棚からカップラーメンをごそごそと取り出し始めた。本心は正義の健康の為なのだが…　それは恥ずかしくて心に秘めておくヴィーネだった。

「えー!ヴィーネの鬼ー!」

「はいはい、なんとでも…」

「悪魔！」
　今まで元気そうに動いていたヴィーネだったが、その正義の発言を聞くとピタッと動きを止めた。
「あ、あれ・・・？ヴィーネさん・・・？」
　その様子を見た正義は流石に不安になりヴィーネの元へと近付き、肩に手を寄せヴィーネと顔を合わせた。
「お、おい、大丈夫か？」
「だ、だだだだ大丈夫・・・」
「いや、そんなに汗だくで言われても・・・」
　今の発言が気に障ったのかと少し心配する正義だが、その裏腹ヴィーネは別の心配をしていた。
　そう、ヴィーネは本物の悪魔である。中学生が設定で自分を悪魔だと自称するアレではなく正真正銘の悪魔だ。その事実をまだ彼氏である正義には話していない。自分が別種族であることを話したらもしかしたら軽蔑されるのではないのか、という不安が彼女にはあった。
　当然、正義がそういう人物でないことをわかってはいるのだが、それほどにヴィーネにとって正義に嫌わるのだけは避けたいことなのだ。

（いつかちゃんと言わないと・・・）

◆

「ヤベー、プリント出すの忘れてた」

同日の夕方。

舞天高校、ヴィーネが通うその高校の1―B教室で金髪の乱れた髪型をしている天真＝ガヴリール＝ホワイトはプリントと睨めっこしていた。このだらしない見た目だけどガヴは一応天使だ。

「もー　しっかりしなさいよ」

その様子を見たヴィーネはガヴに対して話しかけた。そう、この二人は友人関係にある。天使のガヴと悪魔のヴィーネという一見気が合わなそうな外観だが二人はとても仲が良い。

「で、なんのプリント?」

「天界に提出するやつ、独身男性の好きな食べ物10選だってさ、あーだりー」

「あー、結構重要な奴じゃない」

「はー・・・　どうしよ・・・」

「普段からちゃんとこまめにやらないからそうなるのよ」
　ヴィーネのその発言を聞いたガヴはため息をつきながらヴィーネと顔を合わせた。
「ヴィーネはいいよなー、彼氏に聞けばこういうの楽に終わるからさ」
「なっ!?」
　予想外のガヴのその発言にヴィーネは顔を赤くし挙動不審になる。もちろん言ったガヴ本人にそういうヴィーネをいじろうという思惑はなく、ただただ楽をしたいという本心からいっただけである。
「あーなんだっけあの･･･　正義さん?だっけ?あー、あの人にやってもらえたら楽なんだけどなぁ」
「ちょっガヴ!私はそんなことしてな･･･」
「あー、私がいるからあの人は独身じゃありませんって?はっはっは、こりゃまたでっかくノロケられてしまいましたなー」
「ガヴーーーーーーーーーーーーーーーーー!!!」
　ガヴのその発言にヴィーネは更に顔を赤くし、三叉槍を取り出しガヴに向けた。
「ちょっ、タンマ!死ぬ!それ死ぬって!しかもここ学校!」
「はっ」
　ヴィーネは急いで武器を収め周りを確認した。幸い誰にも見られてはいなかったよ

うだが感情に振り回されて我を忘れる自分が情けなくなり少しシュンとした。
「ったく、ヴィーネは怒るとすぐ周りが見えなくなるからなー」
「誰のせいだと思ってるのよ！」
「で、それより彼氏に聞いてくんね？　これ」
まったく反省してないな、こいつ。といったヴィーネの表情などまったく気にせずガヴはヴィーネにプリントを向ける。このようなやり取りをもう何度も繰り返しているから最早慣れた、という感じでヴィーネはプリントに手を取る。いや、慣れるのもどうなのかとは思うが。
「それが・・・」
ヴィーネは自分が悪魔であることを彼に説明してないことをガヴに伝えた。
その発言を聞いたガヴは机に突っ伏す。
「え～・・・」
一気に落胆したガヴだったが、何かを思いついたように顔を上げてヴィーネを顔を合わせた。その顔を見たヴィーネの頭の中を嫌な予感が右往左往する。
「じゃあさ、何か適当に好きな食べ物聞けばいいじゃん、天界のプリントとか関係なしに」
確かにそれなら理に適っている、と思うヴィーネ。あれ？でもこれってよく考えれば

ただガヴが楽しようとしてるのに利用されてるだけなのでは？とヴィーネは考えた。
「ダメよ、ちゃんと自分でしなさい。天使のお仕事なんでしょ」
「え～、いいと思ったのになぁ…”普通”彼女なら彼氏の好きな食べ物のひとつやふたつは知っておく義務があるよな、”普通”は」
ガヴの頼みを完全に断る体制だったヴィーネだが、ガヴのその発言に対してピクリと反応を示す。その様子を見てガヴはにやりと笑みを浮かべた。
「そ、そうなの？」
「そうだよ、あーでも仕方ないか、ヴィーネちゃんは彼氏さんにそこまで興味がないからなー」
その発言で完全にチェックメイト。ガヴの持っていたプリントをヴィーネは勢いよく奪った。
「か、勘違いしないでよね！　こ、これはついでだから！　つ・い・で！」
（ちょ、ちょっろ…）
ヴィーネ含め悪魔も天使も下界に関しては知識をほとんど持ち合わせていない、そこであたかも一般論のように人間の恋人の関係を語れば調べてくれると憶測したガヴだったが、ここまで上手くいくとは思ってはいなかったので予想以上の反応にガヴは驚いていた。

「じゃ、彼氏さんによろしくな～」
ガヴは楽をできた嬉しさでにやにやしながら下校するヴィーネを見送ってそう言った。

◆

時刻は午後５時前、舞天高校の校門の前にはポケットに手を突っ込んでヴィーネを待つ正義の姿があった。彼が大学から帰る駅と自宅を結ぶ道とヴィーネの通学路が一緒の為、時間が合う時はこうやって一緒に帰るのが習慣であった。
（ヴィーネ、遅いな…）
普段なら３０分程前にはもう来るはずなのだが今日はヴィーネが来るのが遅い、そのせいか校門前には生徒が一人も通っておらず正義の姿が見えるだけである。
などと思っていると学校から１人の生徒が急いで駆ける様子が正義の目に入った。
その姿を見て正義は一目で誰かと察する。
「はぁ…　はぁ…　ごめん、待った？」
「いや全然、なんかしてた？」

「ちょっとガヴと話してて・・・」
「あー」
　正義とガヴは直接面識はないが、ヴィーネがよく話に出すので実質お互いに知り合いのようになっている。恐らく学校のそこら辺の同級生よりは詳しいレベルに。
「そ、それよりさ、正義・・・」
「なに？」
　ヴィーネは先程ガヴと話していた質問を正義に問いかけようとするが、先程の会話が会話なだけに聞くのが恥ずかしく口をもごもごさせていた。
「ヴィーネ・・・ ガムでも食ってんの？」
「えっ!? い、いや？」
「じゃあなんでそんな口をもごもごさせてんの」
　その仕草が見られたヴィーネは余計に恥ずかしくなる。と、同時にもうどうにでもなれという気持ちも湧いてくる。
「せ、正義！」
「うわっ!? な、なんだよ」
「正義の好きな食べ物ってなに？」
「え・・・ から揚げ」

簡単。余りにも簡単。聞いてみれば一瞬のこと。それなのに緊張しながら聞いた自分が馬鹿馬鹿しくなりヴィーネは安堵のため息をついた。

「どうしたんだよ急に」

「べ、別にっ！　さ、帰りましょ！」

太陽が沈みかけ、夕日が街を赤くするその中を正義とヴィーネは肩を寄せながら共に歩く。ちょっと恥ずかしかったけど正義のことをもっと知ることができてよかった、と思うヴィーネなのでした。

――――後日、正義の夕食にヴィーネがから揚げを作ったのは別の話。

第２話　運命的なエンカウンター（？）

「…の時にさりげなく…でもそれじゃ…」

少し日が傾きかけた午後４時３０分頃、普通の高校生はもう帰る支度を済ませて帰路へと歩く時間だが、ヴィーネは舞天高校の教室で頭を抱えていた。

放課後ということもあって教室は人が疎らになっており、残っているのはヴィーネの後ろの席に座っているガヴと他の生徒が何名かだけで、ヴィーネのその様子は嫌でもガヴの視界に入っていた。

「ねえ、いい加減目のやり場に困るんだけど…」

この様子をもう２０分は見ているであろうガヴは流石に我慢できなくなり、手に持っていたスマホを眺めながらヴィーネに話しかけた。その声を聞いたヴィーネは我に返り、体を大きく捻らせガヴへと視線を向け、勢いよく声を発した。

「ガヴ～～～助けて～～～!」

ヴィーネのその様子を見たガヴはぎょっとした。というよりもゾッとした。余りにも稀なヴィーネの果てしなく情けない声と態度、ガヴはそのヴィーネを過去に何度か見

たことがあった。
　そういう時は大抵――――。
（うわぁ…これ絶対めんどくさい奴だ…）
　嫌な予感を察したガヴはヴィーネそっちのけで帰り支度を始めた。普段だらだらしているガヴだが、この時は普段の動作とは比べようもないくらいに速い。
「ちょっと、ガヴ!?」
「い、いや～ちょっと今日バイトがあってさ、だから、ね？」
「そんなこと言わずに、ね？　ちょっと、ちょっとだけだから！　ね？」
「おわっ!?　ちょっと掴むな！　袖伸びるって！」
　必死に帰ろうとするガヴに必死にそれを止めようとするヴェーネ。人の少ない教室でそんな騒がしい事をしていて他の人の目につかない訳もなく、２人は注目の的となっていた。
　その２人に近付こうとする影が一つ。
「あらあら～、ヴィーネさんがそんなに慌てるなんて珍しいですね～」
　ガヴとヴィーネに近付いてきた白いロングの髪に十字のヘアピンをした女性。見た目だけでいえばまさに『天使』と形容するのが似合うこの女性の名前は　白羽＝ラフィエル＝エンズワース、ヴィーネとガヴの友人であり、例えではなくガヴと同じように本

物の天使である。
「ラフィエル！　丁度よかった、こいつ何とかしてくれよ！」
　こいつ、と言いながらガヴはヴィーネを指さした。
「ヴィーネさん、どうかしたんですか？」
「え、えっと…それが…」

◆

「えっ!?　ヴィーネさんってお付き合いしている方がいたんですか!?」
「うん…恥ずかしながら…」
　ヴィーネがラフィエルに相談した内容は、端的に言えば『彼氏に自分が悪魔であることをどう打ち明けたらいいか』といったものである。しかし、ヴィーネに彼氏がいることはまだガヴしか言っている相手がおらず、まずはそこからラフィエルに説明したのでヴィーネは少し恥ずかしくなり顔を赤くしていた。本当は言うか悩んだヴィーネだったが、ラフィエルが相談に乗ってくれると言ってくれた優しさを断ることができないのがヴィーネの性格だった。
「それはそれは…何だか面白…いえ、大変なことになってますね」

「今面白いって言いかけなかった？」
「気のせいですよ～、それでヴィーネさんはどう考えているんですか？」
「う～ん…考えてはいるんだけどいい案が浮かばなくて…もしラフィならどうする？」
「そうですねぇ～」
　そう言うとラフィエルは人差し指を頬に当てながら考え込んだ。時折何か不敵な笑みを浮かべるラフィエルを見てヴィーネには嫌な予感が走る。
「私なら素直に言うと思います」
　――――が、ラフィエルが口を開くとヴィーネが思ってたような事とは違う答えが出て来た。
（あれ、意外と普通…）
「どうかしました？」
「い、いや…！　何か意外だなって思っただけよ！」
「そうですか？　だってその相手ってヴィーネさんが好きなお方なんですよね？　ということはヴィーネさんが気に入ったお方なので躊躇いなく正体を言えると思いま――――」
「えー!?　ヴィネット、あんた好きな奴がいるの!?」
　力説するラフィエルの声を更に大きな声で遮るようにまた1人会話に参加してきた

のが、赤い髪にコウモリのヘアピンをしている　胡桃沢＝サタニキア＝マクドウェル。ヴィーネと同じ悪魔で、こちらも友人関係にあたる。

旧知の友人に好きな人物がいることを知って興奮したのか、サターニャはヴィーネに激しく言い寄る。やはり悪魔も人間も女子高校生というものは恋愛話が大好きらしい。一方自分の会話を途中で邪魔されたラフィエルは話す前と変わらぬ笑顔でその場に佇んでいた。

「ねえねえヴィネット、説明しなさいよ！」

腕をぶんぶん振り回しながら喋るサターニャ、それを見てヴィーネは少し困った表情でラフィエルにしたものと同じようにサターニャに説明した。

「――――という訳なんだけど…」

「なぁ～んだ、簡単な事ね、この大悪魔の私にかかればそんな問題すぐ解決よ！」

ヴィーネが話し終わるとサターニャはそう言い高笑いを始めた。その様子を見たラフィエルがサターニャに話しかける。

「では、サターニャさんの理想の男性ってどんなお方ですか？」

「えっ」

その瞬間、サターニャの笑いは一瞬で止まった。

「いえ、大悪魔のサターニャさんなら理想の男性像くらい持ってるものかと思いまして

…」
「も、ももも勿論よ！　この私にかかれば理想の男性像なんて――――」
「ラフィエル、そいつに恋愛の話してもどうせロクな答え帰ってこないぞ」
　再度自慢気に語るサターニャの発言を結局帰らせてもらえなかったガヴが一蹴した。
「な、なによ！　聞いてみなきゃわからないじゃない！」
「へー、じゃあ言ってみろよ」
「そ、そりゃ私を超える大悪魔で――――」
「お前それば っかだな」
「う、うるさいわよ！」
　本来の目的そっちのけで口喧嘩を始める2人、そんなガヴとサターニャなんか意に介さずヴィーネは悩み込んでいた。
　が、次の瞬間サターニャは急に体をヴィーネの方へと向けてヴィーネに話しかけた。
「そうだ、いいこと思い付いたわ！　ヴィネット、あんたのスマホ貸しなさい」
「え、いいけど…どうして？」
　サターニャがそう言うとヴィーネは年相応の可愛らしいスマホをサターニャに渡す。
「直接顔を見て言うのが難しいなら電話で言えばいいのよ！私が今かけてあげるわ」
「ちょっ…サターニャ!?」

　サターニャの突然の提案に驚きヴィーネは急いでスマホを奪い返そうとするが、ラフィエルがそのヴィーネの腕をがっちりと掴み、ヴィーネは身動きが取れない状態となった。
「ナイスよラフィエル！　初めてあんたと気が合ったわね！」
「ちょ、ちょっとラフィ!?」
「ごめんなさいヴィーネさん…私、今回は面白そうなサターニャさんサイドに味方させていただきます！」
「信じてたのに～～～！」
　嬉しそうなラフィエルの表情を見て感嘆するヴィーネ。その傍らでサターニャはスマホをサクサクと操作していき、電話帳の欄を探って行く。
「あれ?　でもヴィネットの彼氏の名前がわからないわね」
「あー、これこれ」
「ちょっ、ガヴまで!?　なんで!?」
　ついに普段他人に興味を余り持たないガヴさえも敵へと回り、ヴィーネは更に悲痛の声を上げた。
「いやー、ヴィーネが話題出しまくる内に私も気になってさ」
「そんなぁ…」

「ヴィネット！　かかったわよ！」
　電話を掛けるやサターニャはスマホをヴィーネにひょいと渡した。同時にラフィエルがヴィーネの拘束を解く。
「え、ちょ、ちょっと待って…心の準備が…」
「ヴィネット！　悪魔たるものガツンといきなさい！」
「ヴィーネさん、ファイトです～」
　半泣きになっているヴィーネの気持ちなどどこ吹く風でラフィエルとサターニャはヴィーネにエールを送る。ガヴは頬杖を付いてただただヴィーネを見守っていた。
　そして数回のコールの後に正義が電話に出た。
『もしもし、ヴィーネ？』
「あ、え、えと、正義？　こ、こんにちは…」
（へー、こんな声してんだ）
　悪魔はもっと殺伐とした男が好みなのかと思っていたガヴは正義の物腰柔らかそうな声に意表を突かれる。いや、よく考えればヴィーネの性格からすればそのような殺伐としたものが好きだとはありえないとすぐわかるのだが。
『あ、どうもこんにちは…じゃなくて何か用？』
「あ～、うん、えっと、その～…」

『……』
「……」
　２人の間に数秒の沈黙が流れる。正義からしたらしたらヴィーネからかけていた手前何を言っていいかわからず、ヴィーネもまたどうしていいかわからない。
「あ～もうヴィネット！　貸しなさい！」
「ちょっ、サターニャ!?」
　サターニャがヴィーネからスマホを奪い取り自分の口元へと移動させた。
『ヴィーネ？　どうし――――』
「ちょっとアンタ！　この大悪魔の私の友人を恋人にしたんだからアンタもちゃんと大悪魔並に強くならないとダメよ！」
「何言ってんだお前ーーー!!」
　ヴィーネが過去見せたことの無い強面でサターニャからスマホを奪い取る。その様子を見てラフィエルはお腹を押さえて笑いを堪え、ガヴはただただ呆れていた。
「ちょっとヴィネット、まだ途中――――」
「あ、正義？　ごめんね、後でちゃんと説明するから！　じゃ！」
　プツッ　プー　プー
「……なんだったんだ」

大学で1人スマホを持ち、正義は茫然としていた。

◆

ヴィーネは舞天高校の校門で1人立ち、正義を待っていた。いつもなら先に正義がいるのがお決まりだが、今日は『課題があるから少し遅くなる、先に帰って』と正義からの連絡があり、それに対してヴィーネは『待つから一緒に帰ろう』と返信した為、この様にヴィーネが待つ形となっている。ちなみに先程の件から約３０分は経過したといったところだ。

「ごめんな、遅くなった」

もう人がいない校門へ向かって正義は小走りに移動しながらヴィーネに向かって少し申し訳なさそうにそう言った。

「ううん、全然。あの、さっきは…」

今度は逆にヴィーネが正義に向かって申し訳なさそうに発言した。『さっきは』というのは勿論ガヴサタラフィが暴走して電話を掛けた先程の件の事だ。

「あー…、あれヴィーネの友達？」

「うん…正義の事を話したらあんなことになっちゃって…、あ！　もう大丈夫よ、〟しっ

かり”説教しておいたから。もう迷惑はかけないわ」
　ヴィーネはそう言って笑顔を正義に対して向けるが、その笑顔の裏には黒いオーラが渦巻いてるような気がして正義は少しぞっとした。と同時に、今後ヴィーネを怒らせるような事はやめようと誓うのであった。
「あ、そうそう！　私正義と行きたいとこがあるの！」
「へー、どこ？」
「この間行った喫茶店でね、そこのブレンドコーヒーが美味しいから正義と一緒に行きたいと思ってたの」
「へー、喫茶店か。じゃあ行くか」
「うん！」
　ヴィーネはそう言ってニコニコしながら正義に肩を寄せて歩き始めた。
（っていうか…ヴィーネって学校で俺の話とか友達にしたりするんだな…）
　先程のヴィーネの発言を少し恥ずかしく思う正義だったが、寄り添ってくるヴィーネの肩にしっかりと応え、同じように道を歩いた。

◆

「あ、ここよ」

舞天高校から歩いて約１０分、２人は『エンジェル珈琲』と看板に書かれた少し趣のある建物の前に立っていた。

「なんか映画とかに出てきそうな喫茶店だな」

「そうなの、内装も結構好きで――――」

「いらっしゃ――――」

ノリノリで話しながら店のドアを開けるヴィーネ、そしてその声に店員の挨拶が重なるように響いた――――が、両者の言葉は２人が目を合わせた瞬間に止まる事になる。

「え」

店内のボサボサの金髪に制服を身に纏った女性はヴィーネを見てそう言った。そしてヴィーネは明らかに知っているその女性の容貌を見て言葉を止めた。

「ちょっ、ガヴ!?　あんたここでバイトしてたの!?」

「ヴィーネ…冷やかし？」

「違う違う！　本当に知らなかったの！」

「まぁいいけどさ…あれ、その人って…」

ガヴは正義へと視線を移してそう言う。正義はというと、初対面とは言えヴィーネから沢山の情報を一方的に知らされていた為、大体の察しは付いていた。

「初めまして。ガヴリールさん、だっけ?」
「あー、ガヴでいいよ。なんか初めて会った気がしないな…」
「ははは、俺も。よろしくな、ガヴ」
「ん」
　そう言うとガヴはまじまじと正義の全身を見渡し、最後に顔を見て口を開いた。
「へー、結構かっこいいじゃん」
「「えっ」」
　ガヴの発言に対して、今度はヴィーネと正義が先程の２人のように同じ言葉を口から漏らした。恐らく２人の言葉の意図は違うと思われるが。
「ちょ、ちょっとガヴ何言ってるのよ！　もう、正義もデレデレしてないで！　席に行くわよ！」
「ちょっ、デレデレなんかしてな…ちょっとヴィーネ!?」
　ヴィーネは焦りながら正義の手を無理やり引っ張り席へと誘導する。その様子を見たガヴはにやにやしながら注文の準備をしていた。

◆

ガヴと2人が会ってから約1時間、2人はエンジェル珈琲を後にして夕焼けで赤く染まった帰り道を歩いていた。ちなみに、あれからもガヴはバイト中であるというのに2人の会話にしょっちゅう入り、正義と『ヴィーネの世話焼き事情』について盛り上がり意気投合していた。そして、その度にヴィーネは恥ずかしそうに顔を赤くした。

「はぁ～、コーヒー結構おいしかったな」

「そうでしょ？　はぁ…でもまさかガヴがいるなんて…」

「別にいいよ、1回会ってみたかったし」

申し訳なさそうにするヴィーネをフォローするように正義がそう言った。フォローとは言うが、実際に正義がガヴと会ってみたかったのは事実だし、話してみて楽しかったのも事実である。

「ねぇ正義、晩ご飯何がいい？」

「んー…、何でもいい」

「もう、何でもいいが一番困るの！」

「だってヴィーネが作ったもの全部美味しいし」

「そ、そ、そう？　だ、だったら仕方ないわね…」

正義の発言に対してヴィーネは顔を赤くする。もちろん正義自信にこういった狙いは無く、無意識に言った発言であるが、ヴィーネに対して効果は抜群だ。

と、次の瞬間、正義は唐突にヴィーネの手を握った。
「ひゃいっ!?」
突然の出来事にヴィーネは驚き、顔を再度赤くした。
「ど、どどどうしたの正義!?」
「いや、前恋人っぽいしたいって言ってたから丁度いいと思って…だめ?」
「だ、だめっていうか嬉しいっていうか…それなら…えいっ!」
今度はヴィーネが正義の腕を掴んで正義に寄り添った。突然の出来事に今度は正義が恥ずかしそうにする。
「うわ、ちょっヴィーネ、近いって!」
「ふふっ、お返しよ」
「…1本取られた」
正義は照れながらも満更ではなく、そのまま足を動き出した。2人はその恰好のまま正義の家へと道を共にした――――。

◆

「じゃ～ん、今日はカレーでーす!」

エプロン姿のヴィーネが嬉しそうにキッチンからリビングへと料理を運ぶ。ほぼ毎日こうしていることもあり、ヴィーネは正義の家にエプロンを常に置いてある。

会話をしながら特に何もなく料理を食べる2人だが、次の瞬間テレビから――――。

『…〝あくま〟でもこれは推測であり――――』

「ぶっ!!」

ヴィーネがむせて咳をし出す。ヴィーネは普段行儀に気を付けているため、これに正義は驚いた。

「ヴィーネ!?　大丈夫か!?」

「だ、大丈夫…ちょっとむせただけ…」

正義が執拗に心配するため、ヴィーネは申し訳なさそうにそう言った。

（わ、忘れてた…今日こそは悪魔ってこと言わないと…）

「せ、正義…聞いて欲しいことがあるの…」

ヴィーネは改まって正座をして正義の目を見た。勿論身長は男の正義のが上の為、ヴィーネが少し顔を上げる形になる。

「何？」

「私…実はね…」

ヴィーネはスカートの裾をぎゅっと握り、一息置いて口を開いた。

「私…実は悪魔なの！」
ヴィーネからすればずっと溜め込んでいた一世一代の告白。
――――が、正義は
「うん…知ってるけど…人のカップラーメン没収したりとか…それだけ？」
特に何も驚かず正義はそう返答した。これにはヴィーネも流石に伝わってない事を察した。
「いや、違うわよ！　ていうか絶対冗談だと思ってるでしょ！」
「いや冗談じゃ…ってうわ!?　なんだそれ!?」
このままじゃ埒が明かないと思ったヴィーネは三叉槍を取り出し、『自分は正真正銘の悪魔だ』と姿で訴えかけた。正義は案の定先程とはまったく違った反応を示す。
「…本当なんだ」
「うん…」
「そっか…よく言ってくれたな」
そう言うと正義はヴィーネの頭を少し撫でた。正義はヴィーネが純粋なのをよくわかっている。だから、この事を伝えるのは相当辛かっただろうと思った正義は、ヴィーネの事を労ろうと思った結果がこの行為だ。
「私の事嫌いになったりしないの…？」

「なんでだよ…寧ろちゃんと言ってくれてありがとな」
正義がそう言った瞬間、ヴィーネは瞳に少し涙が浮かばせた。安堵からか、嬉しいからなのかは本人にもわからない。もちろん正義はその様子に気付いたが、その涙については何も言わなかった。
「正義…今日、泊まっていい？」
「えっ!?　別にヴィーネがいいならいいけど…」
「じゃ、決定！　私お皿片付けるね！」
嬉しそうにヴィーネはキッチンへと駆けて行った。今日くらいはどんな我が儘も許してやろう――と、正義は思った。

◆

「んあ…もうこんな時間か…」
次の日の朝、目が覚めてスマホを確認した正義は眠そうに体を起こした。正義は自分のベッドをヴィーネに貸し、自分は床に敷いた布団で寝たが、目覚めると隣のベッドにもうヴィーネの姿は無かった。
「おはよう、朝食の準備できてるわよ」

正義がリビングに行くと、エプロン姿のヴィーネが朝食の支度をしていた。
「ん…おはようヴィーネ」
まだ寝起きの為、だらだらと移動する正義。だらだらしているのはいつものことかもしれないが、朝は更にその行動が遅くなる。
「あ、そうそう、今日はお弁当を作ってみたの」
「弁当?」
正義がキッチンの方へと目を移すと、そこにはどこから持ってきたのか知らないが弁当箱が２つあり、きちんと布に包まれていた。４つも歳が下の女の子が、自分よりも早起きで、朝食の準備をし、その上人の弁当まで作ってあげているとなると正義は頭が上がらなかった。
朝食を済まし支度をした２人は、共に正義の家から歩き出した。いつもの道だが、今日はヴィーネが正義の手を握っていた為、正義にとっては新鮮な気分だ。
数分歩いていると、目の前に金髪の女の子の姿が目に入り、ヴィーネはすかさず声をかけた。
「ガヴ、おはよう」
「おはよ…って正義さんも一緒?　朝から熱いね～」
「ちょ、ちょっとガヴ!　からかわないでよ!」

「だって事実じゃん」

朝からやいのやいのと言い争いをするガヴとヴィーネ。その２人を見て正義は少し笑っていた。悪魔の彼女にその友達の女の子。正義はこれからの日常が更に楽しそうなりそうだと――――そう思った。